

金剛寶戒寺便

<https://www.houkai-ji.jp>

令和七年一月一日発行 第一三〇号

檀信徒の皆様、新年明けましておめでとう
ございます。年末の市報にお寺が掲載されて
いたこともあり、お参りの多い年越しとなり
ました。

昨年最後の講習会では、知覧特攻隊、藤井
中尉（当時二十九才）のお話を致しました。

時代は昭和二十年、終戦間近の沖縄。アメ
リカ軍は沖縄海域に一五〇〇隻以上。兵力は
のべ五十四万人が迫っていました。沖縄が落
ちれば、次は九州本土。何としても死守しな
ければならない戦況でした。一方、日本軍は
八万六千人の守備兵。兵力だけでなく軍備に
も大きな違いがありました。そこで日本軍が
取った戦法が特攻です。飛行機一機の犠牲で
戦艦や航空母艦に大打撃を与える、当に捨て
身の攻撃です。その航空兵の多くは十四才以
上からなる少年、青年兵だったそうです。

特攻隊員の訓練は過酷さを極め、今の我々
には想像のつかない毎日でした。特攻隊で亡
くなった若者の人数は四千四百人にものぼり
ます。その少年飛行兵の教官が藤井一中尉で
す。

教え子たちが特攻隊として、毎日の様に死
んでいく。「日本が大変な時に、自分は教え
るだけで本当に良いのだろか？」藤井中尉に
は葛藤がありました。そして藤井中尉も特攻

隊として志願をします。妻の福子さん（当時
二十四才）は特攻志願に大反対で思いとどま
るように説得をしますが、藤井中尉の決意は
固く、嘆願書を出したのです。守るべき家族
のいる将校の志願は採用されないのが原則だ
ったのですが、却下をされても藤井中尉は嘆
願書を再提出します。

夫の固い決意を知った福子さんは「私たち
がいたのでは後顧の憂いとなり、思う存分の
活躍ができないでしょうから、一足先に逝っ
て待っています。」との遺書を残し、三才間
近の長女・一子ちゃんと、生後四ヶ月の次
女・智恵子ちゃんに晴れ着を着せて、厳寒の
荒川に身を投げたのでした。

妻子の死を知り、今度は指を切って血染め
の嘆願書を提出した藤井中尉はついに特攻志
願が受理されます。その藤井中尉の亡き我が
子への遺書が残っています。

「十二月になり冷たい風が吹き荒れる日、
荒川の河原の露と消えた命。母と共に血の燃
える父の意思にそって一足先に父に殉じた、
哀れにも悲しい、しかも笑っているように喜
んで母と共に消え去った幼い命がいたように
父も近くお前たちの後を追って逝けることだ
ろう。必ず今度は父の暖かい胸で抱っこして
ねんねしようね。それまで泣かずに待ってい
てね。千恵子ちゃんが泣いたらよくお守しな
さい。ではしばらくさよなら。」そして藤井
中尉も特攻隊員として散っていったのです。

参考文献「あした死ぬかもよ？」ひすいこた
ろう著

決して戦争を肯定しているのでもなく特攻
隊員を称賛しているのでもありません。ただ
ただ悲しい。時代が違っていれば家族四人で
手をつなぎスーパードーにも買い物に行く普通
の家族だったでしょう。そんな風景が見えて
くるようです。日ごろ自分は直ぐに腹を立て
たり、愚痴をいったりしていないだろうか？
未来の日本の為に死を賭して下さった方々に
恥ずかしくない生き方が出来ているだろうか
と省みるのです。

お大師様は「重重帝網なるを即身と名づく」
（全ての存在が繋がって影響しあっている）
と言われています。血が繋がっていても、い
なくても全ての方々に感謝を込めて新年のご
供養を致しました。

法話の会

日時 二月八日（土曜日）十四時より

体験型講座（材料費込み二千円）

手作り雛人形を作ってみよう！

日時 二月十二日（水曜日）十三時半より

講師 古田勝子さん

写経の会（珈琲、ケーキセット千円）

日時 二月二十一日（金曜日）十四時より

場所はいずれも檀信徒会館です

今年はお寺での行事も増やしていきたいと
思っています。本年も宜しくお願い致します。